

# 程度副詞モットの解釈

言語学・応用言語学研究室 1LT12044E 久保舞珠

## 1. 問題となる例文

鷲田清一（2000）の「聴くということ」に次のような文が出てくる。

- (1) （聴くというのは、こちら側からの選択行為でもあるのだ。）  
ひとの話を聴くというのは、それ以外に聴くものがないようにみえるが、じつはもっと選択的な行為である。

ここで疑問に思われたのは、「ひとの話を聴くということ」と何を比較して「ひとの話を聴くということはじつはもっと選択的な行為だ」と言われているのだろうかということである。「ひとの話を聴くということ」の比較対象として以下の二つの可能性を考えた。

- (2) a. ひとの話を聴くということは、音楽などのひとの話以外のものを聴くということよりもっと選択的な行為である、という文である場合。ここでの比較対象は「（ひとの話以外を）聴くということ」である。  
b. ひとの話を聴くということは、あなた（読者）が思っているよりもっと選択的な行為である、という文である場合。ここでの比較対象は「読者の思っていること」である。

比較対象が(2a)だと考えた場合は(3a)、(2b)だと考えた場合は(3b)のような解釈になる。

- (3) a. ひとの話を聴くことは、ひとの話以外を聴くことと同様に選択的な行為であるが、じつはひとの話を聴くことの方がそれが選択的である度合いが高い。  
b. ひとの話を聴くということが選択的な行為だとは思えないかもしれないが、じつはひとの話以外を聴くということと同様に選択的な行為である。

(2a)と(2b)のどちらを比較対象と考えた場合が正しい解釈なのか、先行研究を基に考察した。

## 2. モットに関する先行研究と考察

林（2000）ではモットの用法について以下のように考察している。

- (4) a. (Xハ)(Yヨリ)モットZ (「YもZ」という前提が必要)  
b. (Xハ)(Yヨリ)モットZ (「YもZ」という前提が不必要)【否定的用法】

ここで、(4a)は「さらに」「それ以上に」という累加の意味、(4b)は「～ではなくて」「～ではないが」という否定の意味であると考えられる。

(4a)の用法で、比較対象が「聴くということ」である場合には、(1)は、(3a)のようになる。鷲田(2000)によると、一般に「聴くということ」はある空間にある様々な音の中からその音に注意を向けるという一回の選択がある。「人の話を聴くということ」はその選択に加え、選択した「ひとの話」の中からそのどの内容に自分の意識を向けるのかという二回目の選択があるということである。

(4a)の用法で、比較対象が「読者が思っていること」である場合には、(1)は、次のようになる。

- (5) (読者の皆さんもひとの話を聴くということは選択的な行為だと思っていると思うが、)  
読者が現在思っている以上にひとの話を聴くことはさらに選択的な行為である。  
( = (3a) )

ここで「読者が思っていること」を「読者もひとの話を聴くということは選択的だと思っている」としたのは、(1)のような評論文を読むときには当然、前の文脈を考慮して次の内容を読んでいくと考えるからである。「ひとの話を聴くということ」は二度の選択が起きているということ(1)のモットは意味していると考えられる。

(4b)の用法で、比較対象が「聴くということ」である場合には、(1)は次のようになる。聴くということは選択的な行為ではないが、ひとの話を聴くということは選択的な行為である。これは、「聴くということは選択的な行為である」と述べられている鷲田(2000)の内容にそぐわない。また、比較対象が「読者の思っているもの」である場合に(1)は、「ひとの話を聴くということは、読者が思っているようなものではなくて選択的な行為である」と表せる。鷲田(2000)では、「聴くということ」は選択的な行為だと述べられており、このことから読者は「ひとの話を聴くということ」も選択的な行為だと考えるだろう。したがって、読者も「ひとの話を聴くこと」は選択的な行為であると捉えており、それを否定してひとの話を聴くことは選択的な行為であると述べるのは筋が通らず不適切な文となる。

### 3. 結論

林(2000)の主張に基づいて、(1)のモットの解釈をすると(3a)の解釈になり、このときの「ひとの話を聴くということ」の比較対象としては(2a)と(2b)の両方が適用できることがわかった。

また、比較対象が同じ「読者が思っていること」である場合でも、文章全体の構成の捉え方によって解釈が異なることも見受けられた。つまり、今回の場合にはモットの比較対象が何かということ(1)の解釈には関係がなかったということが結論づけられる。(3a)と(3b)の解釈の違いが生まれたのは、モットが出てくる前の談話を前提として捉えているか否かにあったのである。「聴くということは選択的な行為である」ということ前提として(1)を捉えると(3a)の解釈になり、「聴くということは選択的な行為である」という内容を考慮せずに(1)を捉えると(3b)の解釈になるという具合だ。結果としては、鷲田(2000)の文章全体を読み取った結果、(1)が(3b)の解釈である可能性は小さいと結論づけられた。

ではなぜ(3b)のような解釈も十分に可能であると考えてしまったのであろうか。それは、モットは程度副詞であるにもかかわらず、当該文では程度性を持つようには一般には思われぬ「選択的な」という単語に接続していたため、正しい解釈が妨げられたからと考えられる。このことから、程度性を持つ要素に接続するというモットの特性は極めて重要な性質であり、解釈はそれが成り立つように行われる傾向にあるということが分かった。

### 4. 参考文献

林奈緒子(2000)「比較構文に出現する程度副詞について－「さらに」の分析を中心に－」『筑波応用言語学研究』7: 1-14.

鷲田清一(2000)「聴くということ」植田正治・鷲田清一『まなざしの記憶 だれかの傍らで』138-145.  
東京：株式会社阪急コミュニケーションズ